

学位論文審査及び学力の確認の結果等報告書

令和 6 年 4 月 3 日

報告番号 乙	第373号	氏 名	高橋 佑弥		
審 査 員	主 査 (自署) 藤原 啓司				
	副 査 (自署) 新田 信成				
	副 査 (自署) 寺下 致久				
論文題名	題 名 Histological validation of atrial structural remodeling in patients with atrial fibrillation 雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 European Heart Journal, 44 巻・3339-3353 頁・2023 年				
論文審査 結果の要旨	心房細動 (AF) 患者における心房の構造的リモデリングを組織学的に評価した研究は極めて少ない。本研究では、AF 患者における心房の電気生理学的変化と組織学的変化との関連性を定量的に検証している。 対象は、AF に対してアブレーションを行った患者の内、右房卵円窩上縁より心筋生検を施行された230人である。電気生理学的因子は、心房ペーシング下に測定された心房の平均双極電位波高値、分裂電位の割合、遅延伝導部位の幅とした。組織学的因子として、生検心筋の線維化率、細胞間隙率、心筋粗鬆化率、心筋核密度、脂肪細胞率、心筋細胞サイズ、心筋細胞配列異常の程度を測定した。免疫組織学的染色では、CD3, CD11c, CD20, CD45, CD163陽性炎症細胞浸潤率を測定した (n=60)。加えて、電子顕微鏡にて心房筋の超微細構造を評価された (n=33)。 結果、双極電位波高値、分裂電位、伝導遅延と関連する組織学的因子は線維化率、細胞間隙率、心筋粗鬆化率、心筋核密度であった。CD11cとCD163陽性細胞数 (マクロファージ浸潤) の割合は心筋粗鬆化率と関連していた。電子顕微鏡において拡大した細胞間質では幼若なコラーゲンや毛細血管からの血漿成分の漏出を認め線維化に先行していると予想された。また、細胞実質では種々の程度の筋原線維の消失を認めた。 本研究の結果より、従来、AF 患者における心房リモデリングと関連する組織学的因子は線維化のみと考えられてきたが、心房リモデリングには、線維化以外に細胞間隙の増加、心筋粗鬆化、心筋核密度の低下といった様々な組織学的因子が寄与することが示された。 以上の成績は、AF の原因である心房心筋症の病因解明と AF 患者に対するアブレーション戦略に対して新しい知見を加えたものであり、意義あるものと考えられる。 よって本論文は、博士 (医学) の学位論文として価値あるものと認めた。				
学力の確認の 結果の要旨	学力の確認は口頭試問によって行った。 論文内容及びこれに関連した事項に関して種々の質問を行い、特に本検証結果が今後の AF の病因解明及びアブレーション治療に与える影響について詳しい説明を求めたが、いずれについても満足すべき答弁を得た。 また、専攻学術に関しても大学院博士課程を終えて学位授与される者と同等以上の学識を有し、かつ、研究指導する能力も十分であることを認めた。 外国語は英語について試問を行ったが、外国語文献を自由利用しうる能力があることを認めた。 よって、審査員合議のうえ、本研究科博士課程を修了したものと同等以上に学力があるものと判定した。				
論文審査の結果	合格	不合格	学力の確認の結果	合格	不合格
論文審査日	令和 6 年 4 月 2 日		学力の確認日	令和 6 年 4 月 2 日	

学位論文審査及び学力の確認の結果等報告書

令和 6 年 7 月 2 日

報告番号 乙	第37号	氏 名	横井 研介
審 査 員	主 査 (自署)	藤原 延人	
	副 査 (自署)	伊藤 亜希子	
	副 査 (自署)	川口 孝	
論文題名	題 名 Pulmonary Vein Intervention for Severe Pulmonary Vein Stenosis After Atrial Fibrillation Ablation — A Retrospective Cohort Study — 雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁—頁, 発行西暦年 Circulation journal Circ J. doi: 10.1253/circj.CJ-23-0892, 2024		
論文審査 結果の要旨	心房細動(AF)アブレーション後の肺静脈狭窄(PVS)は、比較的稀な合併症(0.5-4.0%)ではあるが、発症すれば適切な治療を行わないと致命的となる重篤な病態である。本研究では、日本人患者におけるAFアブレーション後PVSに対してカテーテル治療を受けた患者特性および長期転帰を後ろ向きに調査したものである。 対象は、国内の3施設(佐賀大学病院、小倉記念病院、佐賀県医療センター好生館)で2010年から2023年の間に当該治療の適応となった30症例(男性/女性: 26/4、年齢中央値55歳、発症期間: アブレーション後中央値5カ月)の56 病変である。 結果、症候性PVSは27例(90%)、AFの既往は19例(63%)であった。治療法には、33病変(59%)にベアメタルスtent、14病変(25%)にバルーン拡張、9病変に薬剤バルーンを使用され手技成功率100%であった。術後合併症は一過性の3事象を認めたのみで最も懸念された塞栓症は認めなかった。追跡期間中央値584日(四分位範囲265-1165 日)において1年後の再狭窄率35%、2年後は47%であった。多変量Cox回帰分析により、直径7mm未満のデバイス(ハザード比[HR]2.52;95%信頼区間[CI]1.046.0;P=0.040)および完全閉塞病変(HR 3.33;95% CI 1.21-9.15 ;P=0.020)が再狭窄の独立危険因子であることが同定された。 AFアブレーション後PVSへのカテーテル治療は、成功率は高いものの2年以内の再発は約半数と高く厳重なフォローアップが必要であると結論づけている。 以上の成績は、AF アブレーション後の重要な合併症である PVS に対して新しい知見を加えてものであり、意義あるものと考えられる。 よって本論文は、博士(医学)の学位論文として価値あるものと認めた。		
学力の確認の 結果の要旨	学力の確認は口頭試問により行った。 論文内容及びこれに関連した事項に関して種々の質問を行い詳しい説明を求めたが、いずれについても満足すべき答弁を得た。 また、専攻学術に関しても大学院博士課程を終えて学位を授与される者と同等以上の学識を有し、かつ、研究指導する能力も十分であることを認めた。 外国語は英語について試問を行ったが、外国語文献を自由に利用しうる能力があることを認めた。 よって、審査員合議のうえ、本研究科博士課程を修了したものと同等以上の学力があるものと判定した。		
論文審査の結果	合格 不合格	学力の確認の結果	合格 不合格
論文審査日	令和 6 年 7 月 1 日	学力の確認日	令和 6 年 7 月 1 日

学位論文審査及び学力の確認の結果等報告書

令和 6 年 6 月 27 日

報告番号 乙	第375号	氏 名	中山 賢人
審 査 員	主 査 (自署) 江崎 幹宏		
	副 査 (自署) 真鍋 達也		
	副 査 (自署) 下田 良		
論文題名	題 名 Relationship between nutritional therapy and beneficial bacteria ratio in severe disease 雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Journal of acute disease 13 巻 1 号 P26-30 2024 年 2 月		
論文審査 結果の要旨	本論文では2020年1月から12月の間にICUに入院した≥ 18歳の患者を対象に、ICU入室後の1回目と2回目の排便における善玉菌の割合を算出し、割合の変化と患者背景、栄養投与量・栄養方法、臨床転帰との関連を調査した。善玉菌を <i>Bifidobacterium</i> と <i>Lactobacillus</i> と定義し、第1回目から2回目の排便で善玉菌の割合が増加した群を増加群、減少した群を減少群と定義した。また、1週間以内に目標カロリーの50%以上を経腸栄養により摂取できた群をGood EN群と定義した。その結果、善玉菌比率の変化とSOFA/APACHE IIスコアの変化との間に明らかな関連は見られなかったが、Good EN達成割合は減少群よりも増加群で有意に高かった(4/5 vs 0/5, $P=0.01$)。対象症例数が少なく、検体採取が一定していないなどのlimitationはあるものの、以上の結果から、善玉菌の割合の増加が経腸栄養の早期達成に関連している可能性が推察された。 以上の結果は、ICU入院患者における栄養療法戦略の確立において、腸内細菌のパターン改善が寄与し得る可能性を示唆した論文であり、博士(医学)論文として価値あるものと認めた。		
学力の確認の 結果の要旨	学力の確認は口頭試問により行った。 論文内容に関し、種々質問を行い、特に重症患者の腸内細菌の特徴について詳しい説明を求めたが、いずれについても満足すべき答弁を得た。 また、専攻学術に関しても大学院博士課程を終えて学位を授与される者と同等以上の学識を有し、かつ、研究指導する能力も十分であることを認めた。 外国語は英語について試問を行ったが、外国語文献を自由に利用しうる能力があることを認めた。 よって、審査員合議のうえ、本研究科博士課程を修了したものと同等以上の学力があるものと判定した。		
論文審査の結果	合格 不合格	学力の確認の結果	合格 不合格
論文審査日	令和 6 年 6 月 27 日	学力の確認日	令和 6 年 6 月 27 日

学位論文審査及び学力の確認の結果等報告書

令和 6 年 10 月 8 日

報告番号 乙	第376号	氏 名	秀島 未紗子
審 査 員	主 査 (自署)	高本比呂志	
	副 査 (自署)	原 めぐみ	
	副 査 (自署)	佐野 多美子	
論文題名	題 名 Are HPV-negative lesions concerned for the introduction of primary HPV testing for cervical screening in Japan? 雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁 - 頁, 発行西暦年 THE JOURNAL OF Obstetrics and Gynecology Research Volume49 Issue12, Pages 2860-2867, 2023		
論文審査 結果の要旨	本邦では、子宮頸がん検診には問診、視診、子宮頸部の細胞診及び内診が実施されている。高リスク型のヒトパピローマウイルス (hrHPV) 感染と子宮頸がん発症との因果関係は明らかであるが、hrHPV 陰性の悪性病変の見逃しをふせぐため、検診項目に HPV 検査は含まれていない。 本報告では、佐賀市の子宮頸がん検診(2011～2019 年)において細胞診と HPV 検査の両方を受けた 35,525 症例を対象として、細胞診所見と HPV 感染の関連について調査している。特に HPV 陰性症例に焦点をあてて詳細に解析をすすめ、子宮頸がん検診に HPV 検査を導入することの妥当性・有効性について述べている。 これによると、細胞診が軽度扁平上皮内病変 (LSIL)以上の異形成を示し、かつ hrHPV 陽性は 1024 症例、細胞診が LSIL 以上で、hrHPV 陰性は 291 症例であった。この 291 例のうち、256 例に組織診が実施されており、36 例に子宮頸部上皮内腫瘍 (Cervical Intraepithelial Neoplasia2 (CIN2)) 以上の病理診断であった。すなわち全体の LSIL+/hrHPV- の割合は 0.82% (291/35,525) であり、CIN2+/hrHPV- の割合は 0.1% (36/35,525) と低かった。以上の成績は、検診で HPV 検査を実施しても hrHPV 陰性の悪性病変を見逃す確率は非常に低いことを示す新知見である。今後の子宮頸がん検診の検診項目を再検討するうえで、意義あるものと考えられる。 よって本論文は、博士(医学)の学位論文として価値あるものと認めた。		
学力の確認の 結果の要旨	学力の確認は口頭試問により行った。 婦人科腫瘍と HPV 感染など婦人科学に関して種々の質問を行い、特に子宮頸がん検診の日本および世界の状況と問題点などについて詳しい説明を求めたが、いずれについても満足すべき答弁を得た。 また、専攻学術に関しても大学院博士課程を終えて学位を授与される者と同等以上の学識を有し、かつ、研究指導する能力も十分であることを認めた。外国語文献を自由に利用しうる能力があることも認めた。 よって、審査員合議のうえ、本研究科博士課程を修了したものと同等以上の学力があるものと判定した。		
論文審査の結果	☒ 合格 ☐ 不合格	学力の確認の結果	☒ 合格 ☐ 不合格
論文審査日	令和 6 年 10 月 8 日	学力の確認日	令和 6 年 10 月 8 日

学位論文審査及び学力の確認の結果等報告書

令和 6 年 10 月 8 日

報告番号 乙	第377号	氏 名	光 貴子		
審 査 員	主 査 (自署)	青 木 洋 介			
	副 査 (自署)	原 めぐみ			
	副 査 (自署)	船野 芳博			
論文題名	The difference in the effectiveness of human papillomavirus vaccine based on smoking status. The Journal of Obstetrics and Gynaecology Research, 48, 1859-1866, 2022,				
論文審査 結果の要旨	本研究は、ヒトパピローマウイルス (HPV) ワクチン (2、又は4価) 接種の子宮頸部前癌病変の発生抑止効果、および、その効果に及ぼす喫煙の影響について、佐賀市での検診細胞診および組織診の結果を基に研究したものである。 【期間・対象】2014年4月～2020年3月の期間に佐賀市で子宮がん検診を受けた20～24歳の女性7253名：HPV ワクチン接種群2467名および非接種群4786名。 【結果】細胞診HSIL (中等～高度異形成) 以上を認めた割合は0.28% vs 0.77%であり HPV ワクチン接種群において有意に低かった (OR 0.36, 95%CI: 0.16 - 0.81)。子宮頸部異型性判定で、CIN (cervical intraepithelial neoplasia) 2以上の発生率は0.32% vs 0.69%と、同様に有意差を認めた (OR 0.46, 95%CI: 0.21 - 1.00)。一方、喫煙歴の有無で層別解析を行うと、非喫煙者におけるHSIL 以上の割合は、接種群0.1% vs 非接種群0.42%と有意差が確認されたが、喫煙歴 (+) の場合、接種群と非接種群とでは有意差は認められず (OR 0.59, 95%CI: 0.22 - 1.56)、接種群においてもCIN2以上の発生率は喫煙歴 (+) で有意に上昇した。 以上の研究結果は HPV ワクチンの子宮頸癌発生抑制効果を佐賀市在住の女性において確認したことに加え、ワクチン効果に対する喫煙の及ぼす負の影響を証明したものであり、地域における子宮頸癌予防に貢献するものである。 よって本論文は、博士 (医学) の学位論文として価値あるものと認めた。				
学力の確認の 結果の要旨	学力の確認は口頭試問により行った。 HPV ワクチン接種の癌予防効果に加え、HPV の感染抑制についても種々質問を行い、いずれについても満足すべき詳しい回答を得た。 また、専攻学術に関しても大学院博士課程を終えて学位を授与される者と同等以上の学識を有することを確認した。 外国語 (英語) について試問を行ったが、外国語文献を自由に利用しうる能力があることを認めた。 よって、審査員合議のうえ、本研究科博士課程を修了したものと同等以上の学力があるものと判定した。				
論文審査の結果	合格	不合格	学力の確認の結果	合格	不合格
論文審査日	令和 6 年 10 月 8 日		学力の確認日	令和 6 年 10 月 8 日	

学位論文審査及び学力の確認の結果等報告書

令和7年1月6日

報告番号 乙	第378号	氏 名	徳島 緑
審 査 員	主 査 (自署) 江村 正		
	副 査 (自署) 浅口 義人		
	副 査 (自署) 原 めぐみ		
論文題名	題 名 Factors influencing preference for dying at home among people aged ≥65 years: a cross-sectional study in a super-aged area of Japan 雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 International Journal of Gerontology, 18 (3), 138-143, 2024		
論文審査 結果の要旨	本研究は、過疎化・高齢化が進む地域において、在宅死を希望する高齢住民の傾向を明らかにしたものである。佐賀市三瀬村の65歳以上の住民の62%にあたる223人を対象に、在宅死を希望する住民（H群）とそれ以外（O群）の2群に分け、質問紙により研究を行った。参加者の年齢中央値は77歳で、44%が男性で、H群は全体の46.9%であった。単変量解析によると、H群はO群と比較して高齢であり（$p=0.010$）、自家用車を使用している割合が少なかった（$p=0.036$）。多変量解析によると、男性であることと主治医がいないことは、自宅での死を希望することと関連していた（$p=0.031$ および $p=0.041$）。社会的孤立、家族の経済状態、介護に関する知識と、自宅での死を希望することの間に独立した関連は認めなかった。 高齢者の在宅死嗜好の傾向と関連要因を調べた研究は今までにもあるが、本論文は対象を医療・介護資源が乏しい地域に絞り、交通手段や介護知識などの社会背景との関連を調べた初めての研究である。高齢多死社会にどのように対応していくのが良いのか。今後、高齢者の advance-care planning などを行っていく場合などにも非常に有用と思われる。 よって本論文は、博士（医学）の学位論文として価値あるものと認めた。		
学力の確認の 結果の要旨	学力の確認は口頭試問により行った。研究方法や解析結果について詳しい説明を求めたが、いずれについても満足すべき答弁を得た。 また大学院博士課程を終えて学位を授与されるものと同等以上の学識を有し、かつ、研究指導する能力も十分であることを認めた。 外国語は英語について試問を行ったが、外国語文献を自由に利用しうる能力があることを認めた。 よって、審査員合議のうえ、本研究科博士課程を修了した者と同等以上の学力があるものと判定した。		
論文審査の結果	合格 不合格	学力の確認の結果	合格 不合格
論文審査日	令和7年1月6日	学力の確認日	令和7年1月6日

学位論文審査及び学力の確認の結果等報告書

令和7年 1月 6日

報告番号 乙	第379号	氏 名	津田 聡子
審 査 員	主 査 (自署)	松尾 宗明	
	副 査 (自署)	青木 洋介	
	副 査 (自署)	細野 真由子	
論文題名	題 名 Estimated time to emergence of secondary intra-amniotic infection or inflammation since the onset of the preterm premature rupture of membranes 雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Taiwanese Journal of Obstetrics & Gynecology 61 巻 634-640 頁 2022 年		
論文審査 結果の要旨	本論文は、妊娠22週から33週の早産期前期破水において、二次的に羊水内感染・炎症が起こる期間と関連因子に関して検討している。 方法は、妊娠26週から33週で前期破水と診断時に子宮内感染・炎症を認めなかった26例について、前期破水診断から、二次的に羊水内感染・炎症を認めるまでの期間を、カプランマイヤー生存曲線を用いて分析している。羊水内感染は羊水培養が陽性になった時点、羊水内炎症は羊水インターロイキン-6が2.6ng/mLを超えた時点、もしくは娩出胎盤に組織学的絨毛膜羊膜炎を認めた場合は分娩当日とした。 結果は、早産期前期破水から二次的に羊水感染・炎症を認めるまでの期間の中央値は18日であった。7例が羊水内感染・炎症を発症した。羊水内感染・炎症を発症しなかった症例のうち13人が7日以内に分娩となった。 本研究は、早産期前期破水から二次的な羊水内感染/炎症を起こすまでの期間を定量的に示し、妊娠期間の延長のため慎重な経過観察と抗菌薬以外の治療追加の必要性を示唆したもので、意義あるものと考えられる。 よって本論文は、博士(医学)の学位論文として価値あるものと認めた。		
学力の確認の 結果の要旨	学力の確認は口頭試問により行った。 周産期医学に関し、種々質問を行い、特に感染症について詳しい説明を求めたが、いずれについても満足すべき答弁を得た。 また、専攻学術に関しても大学院博士課程を終えて学位を授与される者と同等以上の学識を有し、かつ、研究指導する能力も十分であることを認めた。 外国語は英語について試問を行ったが、外国語文献を自由に利用しうる能力があることを認めた。 よって、審査員合議のうえ、本研究科博士課程を修了したものと同等以上の学力があるものと判定した。		
論文審査の結果	合格 不合格	学力の確認の結果	合格 不合格
論文審査日	令和7年1月6日	学力の確認日	令和7年1月6日